第六回 文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第六回文芸思潮新人賞に御応募くださいまして、まことにありがとうございました。今回は前回よりさらに増えて五七篇の御応募をいただきました。数に比例して内容も充実し、二篇の作品が最優秀賞当選作となりました。新人にふさわしい発想の新鮮さ、着想のユニークさに溢れ、また旧来にない現代に生きた文章が躍動していました。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉に新たに小沢美智恵新選考委員を加え、十一月三日に厳正な選考審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には誌面の都合上、最優秀賞・優秀賞のみを掲載させていただきます。奨励賞作品は、また次号以降極力掲載させていただく予定です。

授賞式は明年二〇二六年一月二十五日（日）午後二度半より東京都大田区民プラザ小ホールにて行ないます。

文芸思潮新人賞は明年も同じ要領で募集いたします。挑戦の志を持った気鋭の新人作品をお待ちしております。どうぞ奮って御応募ください。

最優秀賞

「偶像のエマ」
小岩井豊
（東京都町田市）

「静寂の先」
山田栞里
（兵庫県宝塚市）

優秀賞

「アクアリウム」
遊月飛鳥
（広島県広島市）

奨励賞

「流れ星の首なし」
阿部　分
（千葉県柏市）

「死の四コマ漫画」
成川智也
（和歌山県和歌山市）

佳作

「ビロードの朝」　砂岩龍次
「優しい歌を歌って」　千代田さん
「エントロピー」　飯塚大喜
「きっと私の名前を呼んで」　木田肇
「悪魔とふたつの酒杯」　塔斗ヒロ
「お大事に」　角谷美和
「永遠の七月」　澁澤まこと
「さよならクレール」　海辺こゆび
「Bin.」　杠葉二一八
「夜明けのサルベージ」　高橋明日香

選評

興味深い題材

大高雅博

今回は、興味深い題材を使って創作されたものが幾つかあり、新鮮であった。これは、何かに応募するときには、大事な要素だと考える。

その意味では、当選作山田茉理さんの「静寂の先」はまさに題材の勝利だと言える。突然、高校生の娘が、観想修道院に入るという。そこは、「一度入ると生涯二度と敷地の外には出られず、外界との連絡は遮断される。」場所である。娘と二人で生きてきた母にとっては、衝撃だろう。そこで、すでに物語が始まっている。母の葛藤を中心にして話は進むが、実際、日本にも観想修道院は存在していることを知り、驚きである。小説では母が、娘の進路を許し、娘を信じようとして、送り出す。ただ、選考会では、娘がなぜ、その道を選んだのか、信仰で片付けて良いのかとの指摘があり、もっと、動機を掘り下げる必要があったかもしれない。また、題名の「静寂の先」とあるように、娘の観想修道院の内部の生活、とても難しいことではあるが、それを読みたいという気持ちは起こる。

当選作小岩井豊さんの「偶像のエマ」は問題作である。特別な美少女エマは、通り魔に襲われ、顔の半分を失う。そして、病院から失踪する。暫くしてから彼氏から、エマの友人である「わたし」に、失踪したエマは自分の家におり、喫茶店で会わせるという。喫茶店に行くと彼は一人であり、「わたし」はそうだろうと思うのだが、突然、前の顔をしたエマが現れる。「わたしは驚く」。何故なら、病院から連れ出したのは「わたし」だからである。エマは「わたし」の家にいる。この辺の展開は、意外性があり、とても良い。話としてはここからエマは、二人となり、最初のエマは自ら進んで、生き埋めになり、亡くなり、後からのエマは、彼氏と、東京の大学に行く。その結末をどう考えるか？　細かく見ると、例えば、エマの家族のことなど、多少、無理な筋たてであるかもしれないが、よく出来た小説である。作者は考えてはいなかったかもしれないが、選考会では、ルッキズムの問題を含むという指摘があり、今日的な作品でもあると思われる。

優秀賞遊月飛鳥さんの「アクアリウム」はもらってきた金魚に、夫が奪われ、嫉妬すると言うような、摩訶不思議な小説である。もともと、表面上は別でも、夫婦間には不和があり、金魚によってそれが顕在化し、妻も別の男に走るようなところで、終わる。結末はどうだったか、とは思う。金魚には、艶かしいところがあり、人に化けて男を誘惑するという話は中国の昔の話にあったかもしれない。そういう場合は、男は金魚に精を吸い取られて衰弱するのだが、例えば、妻がその金魚を殺してしまったら、どうなるだろうか、と余計なことを考えてしまった。

奨励賞阿部分さんの「流れ星の首なし」は酒場で偶然横に座った女性が語る恋人の首を絞めて殺した話を聞くと言う作品である。プレパラート、カバーグラスなど、雰囲気のある小道具が登場するが、少し、分かりにくい印象を持った。それは、恋人を殺した「彼女」と、「私」が、似通っていて、判然としない部分があるかもしれない。もう少し、差異があったほうが良いかも知れない。

奨励賞成川智也さんの「死の四コマ漫画」は、珍しいオカルト物である。四コマ漫画で描かれるように人が死んでいくと言う発想は、今まで、ありそうで、なかったのではないかと思われる。読み進めると、何故、そう言うことが起きたのかについて、漠然とではあるが分かる仕組みになっている。発想は良かったと思う。

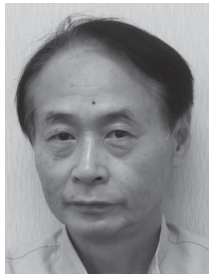
佳作の澁澤まことさんの「永遠の七月」は、時間物のSFであるが、新しさがあると思う。

入選の杜崎まさかずさんの「キメえち」は、はちゃめちゃな小説である。MDMAでおかしくなった女とのボロホテルでの情事。二人とも先がなく、練炭自殺、心中しようとするが、彼女が自分と共に生きようとしていることを知り、二人で生きようとする。ドラッグの中での純愛小説？しかし、煉炭は有害ガスを出し続けており、希望を持ったときに、亡くなる。面白いのだけどね、選考会では、漫画の原作みたいとの評価、良く考えると面白いのだけどね、まだ、完全に小説にはなっていないのだろうね。

今回の新人賞では、何作か成熟した作品もあるのだが、新人賞であるからには、若い人の新しい感覚で、僕たちを驚かせて欲しいと思う。恐らく皆さんには、僕たちには見えない物が見えているはずなのだから。

二人の当選者

五十嵐 勉



今回の新人賞は最優秀賞当選が二作出て、実り豊かだった。第一回で三人の当選者が出て以来初めての複数当選である。

私が第一に推したのは、小岩井豊氏の「偶像のエマ」である。

舞台は学園だが、女王的な存在のエマという女生徒を軸に物語は展開していく。人を引き付ける美貌や肉体的な魅力、優れた頭脳がカリスマのエマを作り、周囲の睥睨（へいげい）される生徒群を形作っている。しかしあるとき、通り魔に遭い、包丁で腹部を刺されたうえに、顔に水酸化ナトリウムをかけられる。「エマの顔は、左半分がそっくり焼けただれていた。瞼はほとんどが焼失し、眼球が露出している……片耳は溶けほとんど顎と同化してしまっている。側頭部の髪の毛は、頭頂へかけてきれいに禿げ上がっていた」という変わりようになる。それからエマは日に日に衰弱していく。エマは失踪するが、恋人の能見啓一のところに現れる。それは通り魔に遭う前のエマで、何一つ欠けていないカリスマそのものエマだった。同時に傷ついたエマは自分の家の押し入れに隠れて暮らすようになる。仮の偶像のエマは、そのまま学校に復帰し、元のままで学校生活を送って卒業していく。その前に、仮のエマと傷を受けたエマと能見啓一と「わたし」とで、ある儀式を行なう。それは「エマは二人いらない」とエマ自身が言うことで、実際のエマを山奥で埋葬する儀式だった。「私はずっと……ここにいる……」という悲痛な声でエマは土に埋められていく。架空のエマが現実の中で生きてゆき、実際の傷を受けたエマが埋葬される結末は、衝撃的で、その衝撃の強さが何かを暗示している恐怖に駆られる。現実にありえないことではあるが、受ける衝撃の強さこそが、この世に生きることの何かを暗示している。どうしようもない運命に襲われそれを乗り越えるとき、人はこれに似た行為をしてしまうのではないか——。その運命が苛酷であればあるほど、それに蓋をし、何かを殺し、犠牲にしてまでも前へ進んでいく。その根本的な運命状況を、この小説は切り出し、腑分けして見せているのではないか。この暗喩の深さは、筆者の流れるような文体に乗って、生き、乗り越えることの構造を、醜悪なものを含ませつつ照射している。エマという人間を作り上げ、それを見事に解体し、また二つを蘇生させて一方を廃棄する生の姿の造形に、才能を感じた。

同じく当選作の山田栞里氏の「静寂の行方」は、カトリック教会の修道女になるための家族、特に母親との訣別を凛然とした文章で描いた作品である。修道院には活動修道院と観想修道院の二種類があり、観想修道院は内部での祈り、労働を中心にして一度入ると生涯二度と敷地の外へは出られず、外部との接触は遮断される。「娘はその『牢獄』の中へ入ろうとしている」と母親は言う。現実の母親と娘の関係は、娘がその厳しい世界に完全に入ることで、別次元の関係へと絶たれ、止揚される。その訣別と断絶が、潔い道の行方に鮮やかに立ち上がる。決然とした訣別はよく描かれていて、宗教の内部と外部の壁の高さと孤高は確かに聳え立ってくる。緊迫した筆の中にそれはよく書かれているが、読者としては、娘がその世界へ入っていく内部の宗教体験や、母親や家族を捨ててまでそれを決断した動機や、内部世界のキリストに仕える純潔性の美しさなど娘の特異な内面世界を読ませてほしいと思った。それは自然だろう。その秘跡ともいうべき領域は実際に内部を経験した者にしかわからないのか、そもそもそこにこそ立ち入れない深い溝があるのかわからないが、小説を書く人間としては今後の課題として、残っているように思う。

惜しくも優秀賞となった遊月飛鳥氏の「アクアリウム」は、特異な題材をうまくその技量ある文章で一篇の小説にしている。力量はある。ただ、その題材をどう処理すればいいのか、最後の段階で、腰が引けたのが、残念だった。同窓会の旧友を持ってきて、不倫へ走ることが、あまりに安直で、テーマから逃げていては、せっかくの興味深い世界の立ち上げが崩壊してしまう。こういうときは、逃げないで強く踏み込む方がおもしろくなる。架空の世界へ踏み込む意志が、真の創作に結びつくだろう。これまでにない題材やテーマに向かい合うとき、作者はどう向かい合い、どう処理すべきか、途方に暮れるときがあるが、常識からつじつまを合わせようとすると、どうしてもスケールが矮小になってしまう。もっと大きくぶち壊す方向へ歩を進める方が決まるはずである。文章力はいいものがあるので、次作に期待したい。

奨励賞の二作もユニークだった。「流れ星の首なし」（阿部分）はタイトルも露骨で変わっているが、とにかく自由奔放に書いているのがいい。むろんその分まとまりがなく、完成度のようなものからは遠くなるが、何か鋭く切りつけるような凶暴さを感じさせるところが、持ち味になってい

入選

「呪縛地の前衛」　河野純一
「覆盆式占い」　友理
「バグ」　佐居東采
「井の壁をよじ登る少女」　テクノ土亮輔
「滲んだウグイス」　宇佐美天
「ひかり」　萌　令児
「顔　with me」　ちくわノート
「空洞の愛」　白川　史
「座礁」　真木ダイク
「蛾」　大貫浩一
「キメえち」　杜崎まさかず
「空き缶の足音」　南原秋楽
「終着駅」　かぱぴー

る。「精子の構造って御存知ですか」と露骨に聞くストレートさに、破滅的な挑戦性があり、こういう衝動がいつか実を結びそうなスリルがある。

「死の四コマ漫画」（成川智也）は、どこにでもありそうな着想ではあるが、実際読んでみるとこの恐怖はひしひしと迫ってきて、スリラー小説の怖さを十分体現していると思った。これはこれで一つの才能であり、おもしろい領域を開拓していきそうな素質を感じた。世界には、報われない怨みや、嘆きや、憎しみが渦巻いていることも否定しない。それらを引き受けて、負のパッションとして展開していくことは、小説の有効な領域ではある。さらに果敢に挑戦していってもらいたい。

これまで六回の新人賞作品を見せてもらったが、やはり発想の柔軟さ、新鮮さ、衝撃性は、銀華文学賞作品よりも豊かで、けっして日本の若い世代の文章創作力は衰えていないことを痛感した。何よりも、文章力の深さや彫琢力において、高レベルの力量を持っている人たちがたくさんいることは、驚きだった。こうした創作力をしっかり保持しつつ、この裾野の上に、大輪の花が咲き、日本文学のこれからを過去にけっしてひけをとらない豊かな花園にしていってくれることを心から願っている。

感覚の不確かさをあぶりだす

小浜清志

「偶像のエマ」は人間の感覚の不確かさをあぶりだそうと苦闘した作品で読みごたえがあった。完璧ともいえるエマは美も知性も感性も人とは異なっている。としてエマが登場するのだが、果たしてそのような存在があり得るのだろうかとの疑問が最初に浮かんだ。エマ自体が偶像として君臨しているのではないか。どんな人にも偶像はあるしある意味偶像がなければこの世の中はエゴと欺瞞にみちた荒野に見えるのではないかと思ってしまう。偶像こそが世の中を安穏にする感覚ではないかとさえ思えてくる。

その完璧なエマがある日無残にも壊されてしまう。顔の一部が削り取られて薬品を浴びせられてただれている。完璧だったエマが消えてしまったのだ。しかし、完璧なエマは主人公の家にいると言い張る。もうこうなると偶像は偶像を生み果てしなく虚構をさまようしかない。ここでエマを永久に葬り去ることで出口を見出そうとするのだが、それがうまくいったとは思えない。見方を変えると全く違うものに見えることも作品のよさであろう。

「静寂の先」は重みのある作品ではあるが琴線に触れてこないのは何故だろうかと最初に思った。高校生の娘が突然に修道院に入りたいと告げるところから始まるのだが、母親である私と娘の信じる神とを比較しているようなとらえ方がすっきりとしなかった。親としてここまでやってきたのになぜ神のもとに行こうとするのか。その煩悶は理解できるけれど私の独白が長すぎる。もっと、娘と語り合える場面があれば膨らみも出てくるだろうが、一方的な妄想だけでは読み手に届かない。

娘さんは親であるあなたに感謝の念を持っていると思うが、それ以上に信仰の道に進みたいと願っているのでしょう。その心を娘との会話などで描いていればこの作品はもっと評価が上がったでしょう。

いろいろな試み

小沢美智恵

今回の新人賞の候補作は、現実とは異なる非日常的な設定を持つ世界を舞台にした物語が多かった。

SNSやバーチャル空間の発達で、現代人の「日常」そのものが多層化し、非現実的な側面を帯びているのかもしれない。いろいろな試みの小説が出てくるのは頼もしいかぎりである。

当選作・小岩井豊「偶像のエマ」は、周囲の者がみな圧倒されてしまうほどの美貌の持ち主・國枝エマが、通り魔に遭い、その美貌を失うところから始まる。その変化は、「顔は、左半分がそっくり焼きただれていた。瞼はほとんどが焼失し、眼球が露出している。左目は角膜がなく、水晶体が表へ出ており白く濁っている。そこに視力はないのだろう。片耳は溶け、ほとんど顎と同化してしまっている。側頭部の髪の毛は頭頂へかけてきれいに禿げあがっていた」と描写される。同一人物のはずなのに、周囲の扱いも変わり、エマは「何をもって私は國枝エマだったんだろう。私はルッキズムだけの薄っぺらい人間だったのか」と悩み、「どんな風になっても私は私じゃん」と思いながらも気力を失い、失踪してしまう。サスペンス仕立てになっているのでこれ以上は書かないが、ラストは意表をついて衝撃的である。現実にはありえない話でありながら、現実問題と

してルッキズム（外見至上主義）の根深さを考えさせる作品になっている。非日常のよそおいが、むしろ現代のリアルを照らす鏡になっているのかもしれない。

優秀賞・遊月飛鳥「アクアリウム」はリアリズム小説の体をなしながら、現実と幻想の境を曖昧にして不思議なファンタジー性を醸している作品である。結婚十年以上を経た子どものいない専業主婦が主人公で、夫はもはや妻に性的関心を失い、優美な金魚に夢中になっている。同窓会の夜、妻が早めに帰宅すると、夫が居間で金魚（のような女性）と交わっているのを見て、妻はかつて自分に思いを寄せていた同窓の男性に連絡するという筋立てである。こう書くと、男性から性的に欲望されることだけが自分の存在価値であるような虚しい女性の話と受け取られそうだが、金魚がその虚しさから生まれたメタファーだと考えると物語の奥が深くなる。ファンタジーは現実の苦しみを直視できないところから、自分を守るために生まれてくる世界である。作品全体を包む流麗な文章も印象に残った。

奨励賞・阿部分「流れ星の首なし」は、バーで出会った男女がアルコールを飲みながらとりとめのない話をする作品である。女は男の母親ほどの年齢で、恋人の首を絞めて服役していたことがあるという。理科の教師である男が、「どうして恋人の首を絞めたのか」と尋ねるところから話は始まる。まるで「風が吹けば桶屋が儲かる」式に、一見無関係な事柄が連鎖して発展していく話の流れは軽妙で、いつしか引き込まれてしまう魅力を持っている。才筆なのだろう。ただタイトルの意味がわからなかった。

奨励賞・成川智也「死の四コマ漫画」は、漫画の予告通りに人が死んでいく非現実的な世界の作品である。次はどうなるのだろうと、登場人物の行方や結末への興味をかきたて、楽しく読めるエンターテインメント作品に仕上がっている。作中、人物の名前や文章の一部を故意に消して効果をあげる試みがなされていたが、実際に印刷する場合は難しいうえ、私にはそれほど有効とは思えなかった。ただ表現に対するその意気込みは買いたいと思った。

正統的なリアリズム小説なので最後にまわしたが、当選作・山田栞里「静寂の先」は、神に呼ばれ修道女になると言いだした娘の母の、その決心を認めるまでの葛藤を描いた作品である。

まず文章がいい。「活動修道院」と「観想修道院」の違いをはじめ、カトリックに関する知識が要所要所で手際よく披露されるその手際の良さにも感心した。

信仰心の深い娘にとっては最も素晴らしい出来事である修道院入りが、母親にとっては娘を失うも同然の最も苦痛の出来事であることもひしひしと伝わってくる。

まだ判断力の乏しい子供であることもあり、途中で誤りだったと気づくこともあるのではないかという懸念や、神

の愛に応えたいという娘の決断を尊重するべきではないかという思いに、心が揺れ動くさまも実によく描かれている。

それだけに、カトリックを批判する宗教団体と宗教自体を馬鹿にする学生たちに遭遇して、猛然と反感が湧きあがり、急展開に「娘の信じる道を、せめて母であるこの私だけは信じて、認めてやらねばならないのだ」と修道院入りを認める結果になるのがやや唐突に感じられた。

外部への反発ではなく、真に娘の信仰心に負けての結果でなければ、ラスト、修道院に娘を送っていったとき、「神のことなど何も分からない私でも、なんとなく、今ここに聖霊が下って娘を迎えに来たのではないかと思えた。（略）私の心は穏やかだった」という心境には至れないのではないか、そんな思いが残った。

母親の気持ちは充分過ぎるほど書かれているので、もう少し娘の気持ちを娘の言葉で語る部分を増やしたら、印象はだいぶ違ってくるのではないかと思われた。

文芸思潮編集部
同人雑誌下読みアルバイト募集
週一日～二日3～4時間／持帰り可　時給一四〇〇円
インデザインソフトが使える方　時給一七〇〇円
委細面談　TEL 090・8171・9771五十嵐
mail; bungeisc@asiawave.co.jp

発想の面白さ

八覚正大

コロナが明けた後の夏は、まさに日本が遭遇した未曽有の「暑さ」と言えます。人間も高齢者を中心に、バタバタと身体を損ねた者が……。不作はほとんど出会ったことのなかったサトイモが、多くの場所で葉を焼かれ絶滅に瀕した状況でした……。

さて、今回は発想の工夫された面白さは感じたものの、目を見張り驚きをもって接した作品は少なかったと思いました。以下、選考にあたって感じたことを書いてみます。

「静寂の先」

娘が修道女になる、と言い出されて当惑した母親の視点、それは良く描かれていると思います。〈私の立つ位置からは余りに眩くて娘の姿はもはやよく見えなかった〉と。その因となるできごととしては、娘は家の近くにあるカトリックの小さな教会に通い始め、共同体の一員となって行き……自然の流れで中高一貫のカトリックの女子校に入学したと。一方、その娘が三歳の時、主人公は夫と死別し、あ

る意味母親としてがむしゃらに育ててきたと。終り近く、カトリックを批判する女性も出ては来ますが、（あっけなく）娘は修道院に入ってしまいます……。曲がりなりにも娘を育ててきた母親の驚き、それは良く描け伝わっては来ます、ある種の不条理とも言えるでしょう。またその学校の教員集団も、どこか拉致に近いような感覚もあります。でもこのあまりに情報の多い時代に、こんなにスルッと人は信仰に入ってしまうものなのか、娘本人の内面を読みたい気もし、入ってからの後悔こそ、実存の姿のような気もしてきます。

かつて映画「尼僧ヨアンナ」（イェジー・カワレロウィッチ）を見て、その性の抑圧の描かれ方に驚き、また学生時代、キリスト教研修旅行（信者ではありませんでしたが）でイタリア、ドイツ……などの修道院を巡った経験からすると、その入り口の部分しか描かれていない気もします。却って母親の子離れの一つの形が投影された気も……好きな男性の遠い勤務地に一緒に行ってしまった娘と～どこが違うのだろうかとも。

「偶像のエマ」

同じ高校に入学した男女の生徒。そこに國枝エマという〈自分たちとは決定的に違う〉、女王様的とでもいえる女子がいます。そこまでは、リアリティを持って読めました。その女子生徒がどのように振舞い、そして皆が隷属していくか――と言うような構図も予想されました。ところがエマは通り魔に遭い顔をめちゃくちゃにさてしまいます。〈左半分がそっくり焼けただれ…瞼はほとんど焼失し、眼球が露出している……〉そのエマは程なくして病院を抜け出し行方不明となります。それからの男友達能見（のみ）の言葉〈エマがいなくなったことは確かに悲しい。しかしおかげで、彼女の偶像としての価値が高まった。手が届かないからこそ國枝エマは輝く。事実、エマが行方不明になってからぼくの想像は捗った……想像より現実味を増した〉と。そこまでは読むことはできました。

しかし二人のエマが出て来た辺りから着いていけなくなった感があります。能見が〈ぼくだって自覚してる。彼女はぼくが作り出した幻想で、細部まで精巧に再現されただけの別人だって。だがこのエマもまた、本物のエマであるという考えは変わらない〉と。以後は、タルコフスキーの「惑星ソラリス」（思考したものがソラリスの海から立ち上がって来てしまう）を少し連想しつつ、また二年前の銀華文学賞当選作「量子の母」（実物そっくりに作られた母親像）を思い出しもしたが、生きている実存としての命を描くというより何か観念を捏（こ）ね繰り回し過ぎた感が。

「アクアリウム」

出だしは印象的です。〈夫が金魚を持って帰った。いや、生物なのだから『連れて帰った』と言うべきか。真っ黒で、光の反射具合によって黒の向こうから金色が透けて見える金魚だった。体のわりにずいぶん大きな、扇形に反り返った尾を翻して、……ビニールの袋の中で揺れている〉、その金魚に夫は恋をしてしまう。〈私は、勘違いをしていた。夫が錦（鯉の名前）に向ける感情の意味を。わが子に抱く愛着などではなかったのだ。雌に向ける性愛だったのだ〉と。夫との間には一瞬授かった命もあったが、死産だった過去がある。そしてラスト、夫がその金魚が変身したかのような女と交わっている幻想のようなものを見てしまう、そして自らも救いを大学のサークルの男性に求めつつ終わる。金魚を中心にした描写はなかなか読ませましたが、ラストが少し曖昧な逃げのような感も。

「死の四コマ漫画」

四コマ漫画に殺される……という発想は面白い気はしました。ミステリアスな感覚は読ませるところもありました。ただ、はじめから四コマ漫画に殺されることを前提に書かれていて、それ以上に文学としての想像を喚起されるものは感じませんでした。

「流れ星の首なし」

恋人の首を絞めて、刑務所に入り、三十六歳で出所した女性と、その年に小学生になって、今では理科の教員をやっている男性との、とあるバーでの対話……。理科の描写はいろいろ出て来て面白くは読めましたが～小説としてはよく分かりませんでした。

「悪魔とふたつの酒杯」

看護師から見た、ある医師の人生。病院を描いた部分には、妙にリアリティが感じられました。その先生の名前は眼目（さっか）。〈眼目先生は眼科にも作家にもならず、この大学病院で勤務している〉と。〈日中に見ると赤色なのに、この時間に見るとオレンジ色に見える。私はこの時間帯の病院の外観が好きだ。それに、歴史が感じられるこの病院が好きだ、ところどころ改修され新しくなっているものの、目には見えない歴史が積み重なっている〉、この部分の描写は病院という人の命に関わる場の情感を見事に伝えていると感じました。また〈「誰でも最後は必ず死ぬのに、医者は何のためにいるんだよォ」〉……あたりまでは期待して読み進められました。ただ、その後の一卵性双生児の妹と先生との近親相姦の話、そして妹の死と先生の自殺は奇を衒ったようで意味を感じられませんでした。

「永遠の七月」

日記形式で、始めはなんだろうと思われましたが、時間をさかのぼる話、SFというより心理幻想的な感が……で興味はあまり湧きませんでした。ただ偶然評者の誕生日が七月八日でそれが気になりました（笑）。

「空き缶の足音」

怪我をして入院している孤独な青年の、独白のような小説。

スプレーをゴキブリに噴射したシーンは興味を惹かれて読みました。自分で自分を殴ったというのは少し「ファイトクラブ」という映画を思い出させもしました。ただ独白で終わらせない何かを描いて欲しい気が……たとえば誰かとのリアルな関係を。

「覆盆式占い」

父親の三回忌の日取りを決めるために、山寺に行った青年の話。（今の時期にしか、できない占いがあるんですよ）と住職の奥さんに言われ、その木苺を使った占いが始まり……ちょっと幻想的な感覚になります。〈わたしはいつしか、わたしが奥さんに着物を着せてやるのを想像していた。赤い。……彼女の前に屈みこみ、……帯が――〉〈わたしはいったい、どうしてこんなに後ろめたく慌てているのだ〉〈また、みのあるうちに　まだ、みのあるうちに　懐紙から潰れた紅が滲んで、わたしの手のひらを染めている。わたしはそいつを口に含み、噛み砕いてごくりと呑みしだくと、アクセルを強く踏み込んだ。〉……どこかエロスの感覚が――湧いてくる、不思議な詩的小説に感じられました。

「キメえち」

ＭＤＭＡなどの麻薬を使い合った語り手の主人公とその彼女「ハッちゃん」の話、死んだと思った彼女は生きていた。で、なんなのか……。

文芸思潮
銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・短歌賞
授賞式&祝賀会・懇親会

読者の皆様、今年は「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わし合いましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●二〇二六年一月二十五日（日）
授賞式午後二時半／祝賀会・懇親会六時半
会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール
東京都大田区下丸子三・一・三
ＴＥＬ０３・３７５０・１６１１
※東急・多摩川線「下丸子」駅前
会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円
問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮
ＴＥＬ〇三・五七〇六・七八四七里見・五十嵐まで
または 090-8171-9771 まで

第７回　文芸思潮新人賞　作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない尖鋭な小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格● 2026 年 4 月 30 日時点において 39 歳以下の者

応募規定● 2 万字以内。ワープロ原稿は A4 用紙 40 字× 30 行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400 字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合は A4 を用いること。
別紙に①応募部門を明記（**2026 第７回文芸思潮新人賞応募作品と明記**）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴
応募者には結果を通知する。

応募審査料● 2800 円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは 20US ドル。切手も可。郵便為替 2000 円＋切手も可。（外国切手は不可）

応募先●〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社
「文芸思潮」新人賞係
TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848　E-mail　bungeisc@asiawave.co.jp

賞●文芸思潮新人賞
最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金 20 万円（受賞者 2 名の場合は 12 万円、3 名の場合は 10 万円）
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金 3 万円（4 名以上の場合は 2 万円）
奨励賞■賞状・賞メダル　佳作・入選■賞状

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切● 2026 年 4 月 30 日（当日消印有効）

発表●予選通過者は 2026 年 9 月 25 日発売の「文芸思潮」101 号に発表する。受賞作・優秀作は 2026 年 12 月 25 日発売の「文芸思潮」102 号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から　新しい世代による新しい小説を期待する。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て表面はきれいに覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の本質的な問題が潜んでいる。それらを剔出するような新鋭の作品を期待しています。